口語詩句７月総評　龍　秀美　　202307
＜総評＞
前例が無いこの夏の暑さ。今月の作品にも暑さに反応する身体の影響があらわれているのではないかと思える。その中でも今月は優れた作品が多く、選別が難しかった。

朝顔がひらく
一部始終を
語ることは出来なくて
無理解で殴り合う

桜望子　山形県
――「朝顔がひらく」と「殴り合う」、「一部始終を語る」と「無理解」。相反する要素を対立させて、理解することの困難を描く。言葉で完全に語ることの不可能も。

風鈴の内臓部分に満ちる闇

桜望子　山形県
――口や舌（ぜつ）という身体的なものを備えた風鈴。そこから音色という語りがこぼれるが、身体には闇も備わっている。総じて今月この作者はコミュニケーションの困難をうたっているようだ。

唇は残らない　昼の火葬場

合川秋穂　東京都
―唇は人体のなかでも骨格によらずできており、耳たぶなどと同じく官能的な部分でもある。跡形もなく失われるものへの哀切と執着。

仕事って楽しまないとダメですか

楽しくないけど真面目ですぼく

まちりこ　埼玉県

――近年、がんばれという代わりに楽しめという風潮がある。仕事というものはいつも楽しめるものではない。簡単に記号化してすり減る言葉には危惧がある。

光は目を探して飛び降りつづける

立花ばとん　東京都
――降り注ぐ光だが、受け止める「目」が無ければ意味を持たない。深山に咲く桜が人の目に触れないように。

あいさつが弱くてあたし川に来る

松下　誠一　東京都

―川というのは何か不思議なもので、水が流れているだけで慰められる。あいさつが「できない」のではなく、なんとはない「弱さ」に川はちょうどいいのだろう。

こいびとの胃に数百のしらすの目

松下　誠一　東京都 2
――恋人という美しい存在もたくさんの命を食べて生きる動物に変わりはない。昔の人は皮肉一枚の下に白骨を見たが。

七月の神が難産　湯を沸かす

中矢　温　愛媛県

―この暑さはまったく神様が火を焚いているとしか思えない。

ユニゾンが水の底から聞こえたら

マッチを擦れば過去は消え去る

小林紅石　埼玉県

―追想の夏に水底から聞こえるはるかな声。身を捨てるほどの祖国はありや。

少女の右口角に付いたクリームは

左手薬指で拭うべき

スズキセーホン　千葉県

―なるほど、それが一番魅惑的な仕草。

浜昼顔ジョバンニの父帰郷する

田崎森太　東京都

―この取り合わせは美しい物語を思わせる。

わたしはわたしを遠ざけて
生きながらえた、鈴の音がする。

こはくいろ　大阪府

―わたしのままで生きながらえることができない。この世はそういうことが多く、救いは鈴の音のようにはるかだ。

わたしたちはすっかり
「出て行った人」なのに
「福島から来た人」のまま

加藤　万結子　愛知県
――帰れない故郷からは出て行ったのに、いま身を置く場からはよそから来たと言われる。宙吊りの身の上を作り出すあの事故。

思考が親指のスピードを上ま

わるとき、その差分に咲く花

伊澤　椅子　東京都

──発語という身体性と身体動作の新しい関係。

ロンサムを夏の艤装に数えれば

過ぎ去るもののひとつとなるなら

大嶋　碧月　兵庫県

──種の最後の個体と言われたウミガメ、ロンサムジョージ。夏の艤装にはふさわしい。

どうしても

茄子のかたちが許せない

真島しましま　千葉県

──あるものの有り様が気になって仕方がないということはよくある。それにも関わらず、そのわけがわからない。茄子はそういうものだそうだ。

公園でシーソー遊びする親子

子供と親は交互に重い

和泉次郎　新潟県

――親が常に子供を育てているわけではない。その逆もあるのだろう。

二十歳過ぎていますか
こんなはずじゃなかったですか
あたためますか

うろ仔　北海道

―定型の質問文の中に唐突に現れる異質の質問は罠か悪意かもしれない。

酒瓶で殴れば少し痛いものです

涼木　和貴　北海道

―まったく、そうですね。

かたちを身体に沁み込ませ

すべて忘れる

音を受けいれ声に呼ばれ

踊りになる

瀧瀬　彩恵　静岡県

――踊りという行為の本質を言葉で表せばこうなる。